

# 雑誌『出版と革命』にみられる

## 1920年代のロシア・フォークロア研究

坂内徳明

### 1

ロシア革命直後の出版活動が難事業であったことは想像に難くない。政治・社会革命が文化革命へと及ぶ時、出版は文化運動にとって決定的に不可欠な要素として大きな意義を持つからである。ソビエトの1920年代の出版活動は、革命とそれに続く国内戦による混乱の中であって、紙や印刷手段の欠乏、急務となった啓蒙活動など困難な問題が山積する中で進められていった。

雑誌『出版と革命』(Печать и революция)は、革命直後の熱気と興奮、そして苦悩をじかに誌面に反映させながら、20年代に発行された「厚い雑誌」<sup>トルスタヤ・フョーニョーガ</sup>のひとつである。ロシア語で言う「厚い雑誌」とは、19世紀以来の伝統を持つ文学・評論の総合雑誌のことだがソビエト時代にはいっても、出版活動をめぐる数々の悪条件にもかかわらず、『赤い処女地』『文学とマルクス主義』『シベリヤの火』『レフ』『新レフ』『若き親衛隊』<sup>(1)</sup>などが20年代前半に続々と発刊されたのである。しかしこれら一連の雑誌の中であって『出版と革命』誌は、以下で述べるとおり、他の雑誌とはいささか異なる性格を示している。本稿のねらいは、ほぼ10年間にわたってこの雑誌に掲載された記事の中からフォークロア研究に関する記事を取りあげ、そこに反映された

問題点を検討することにある。

### 2

『出版と革命』誌におけるフォークロア関係の記事を検討する前に、雑誌そのものについて述べておく必要がある。

ロシア革命はただちに、革命前<sup>(2)</sup>の70パーセントを越える文盲の撲滅と、文化啓蒙運動の推進とを出版事業に対しても要求した。これら諸問題の解決と具体的な出版条件の改善を目的としてゴズズダート(国立出版所)が設立されたのは1919年5月である。これはゴーリキイとルナチャールスキイのイニシアチブにもとづいて、ナルコムプロス(教育人民委員会)の文学・出版部門、フツイク(全ロシア中央執行委員会)の出版部門などが合流して作られた機関である<sup>(3)</sup>。その一方で、一定程度の「出版の自由」が認められ、内戦期には個人による出版活動も行なわれていた。しかしその出版点数の変化(1919年289点、1920年122点、1921年8月まで23点)がはっきり示すように、その「自由」も漸次制限されつつあった。「出版の自由」をめぐる問題は、内戦の混乱という状況下で、紙と印刷手段をいかに調達し管理するか、という何<sup>(4)</sup>よりもまず現実的な問題であったのである<sup>(5)</sup>。

国内戦の終結、ならびに1921年3月に開

始されたネッブは、出版をめぐる多くの悪条件を緩和し、印刷・出版活動に活気をもたらした。雑誌『出版と革命』がゴシズダートの機関誌として発刊されたのは、同年6月である。<sup>(6)</sup>これは、以後相次ぐ「厚い雑誌」のトップを切って、文芸誌『赤い処女地』（編集長ヴォロンスキイ、—1942）と同時に発刊された。創刊号は、国家と芸術の関係を格調高く、しかも大胆に論じたルナチャールスキイの巻頭論文「本の自由と革命」をはじめ、メシチュリャコフ「ゴシズダートの仕事について」、ポロンスキイ「ゴシズダートの当面の課題」などの論文、100ページにわたる書評、西欧ならびにソ連国内の文化動向の紹介から構成され、全体で190ページほどであった。

編集メンバーは、ルナチャールスキイ、メシチュリャコフ、ボクロフスキイ、ポロンスキイ、スクヴォルツォーフ・コステバノフの5人だった。<sup>(7)</sup>中でも、責任編集者であったポロンスキイ（本名グーシン）の活躍はめざましく、ルナチャールスキイをして「真正正銘の名ジャーナリスト」と呼ばしめた人物であった。同じ編集メンバーのひとりだったメシチュリャコフの回想によればポロンスキイは「自分で執筆者を選び、原稿を依頼し、説得したばかりか、自ら論文を直し、雑誌のために論文を執筆し、ゴシズダートの中で派手に暴れまわった」<sup>(8)</sup>という。

この編集メンバーは1929年の第4号から一新し、フリーチェが編集長、ベスパーロフ（フリーチェの死後に編集長）、ケールジェンツェフ、ベレヴェールゼフが編集に加わった。しかしこの交替によって雑誌は再編成され、いわゆる「文学戦線」<sup>リトフニツ</sup>グループの機関誌と化し、1930年6月には終刊の運命をたどることになる。<sup>(9)</sup>こうして雑誌『出版と革命』は、1921年から30年まで10年間にわたって刊行され、全部で71号（68回刊行）まで数え

た。副題は最初「批評とビブリオの雑誌」だったが、第2号から「文学・芸術・批評・ビブリオの雑誌」となり、編集メンバーの交替の後には「芸術のマルクス主義的批評誌」と変化していった。一冊のページ数は平均して200-300ページである。

雑誌は、大きく見て、論文・文献紹介と書評、そして雑報欄から構成されていた。特に書評や文献紹介には多くのページが割かれていたが、しかしそのことによってこの雑誌をたんなる書評誌と考えるべきではない。当時の『ブラウダ』は、この雑誌について次のように述べている、「批評とビブリオの雑誌ではあるが、われわれが見なれている形の専門誌とは全く異なっている。この雑誌は、狭いビブリオや死んだ理論から脱け出て、出版に集約されるあらゆる問題の把握をめざしている。その点でこの雑誌はきわめて興味深い」<sup>(10)</sup>と。

この雑誌は、同時に発刊された『赤い処女地』のように、周囲に新旧両世代の文学者を数多く集めて文学作品を中心として掲載するといったことはなかったが、文学研究の理論と方法を探求した論文も掲載し、それを契機として論争が生じたこともあった。フォルマリズム特集（1924年第5号）、文学研究における社会学的方法を論じたサクーリン論文とそれをめぐっての「文学史的方法的課題」特集（1925-5・6合併号）、「社会的注文に関する論争」特集（1929-1）などがその例であり、『出版と革命』誌もまた20年代の文学理論の動向と推移を反映していたのである。

文学理論以外にも、文学史、芸術史、芸術理論など幅広い分野の論文が掲載された。また、特に初期の雑誌に見られる現象として出版条件や出版事業を具体的に論じたもの——例えば、上述の創刊号におけるメシチュリャコフ、ポロンスキイ論文、ベリスキイ「ロシアの製紙工業」（1921-1）、ヤニーツ

キイ「図書館の最近の活動に関する若干の総括」、シチュルクノーフ「5年間の出版に関する法律」（ともに1922-7）——が数多く掲載されたことも注目に値する。

しかし何と言っても『出版と革命』誌の中心は、文献目録にもなぞらえるべき文献案内と多数の書評であり、これがこの雑誌の基本的性格を形作っていたと考えられる。文献案内の例としては、エス・エル文献総覧(1922-8)や1922年発行の法学雑誌総覧(1923-3)、「ホフマンに関する新たな文献から」(1924-2)や「1917-22年のチェーホフ論」(1923-7)から、文盲撲滅に関する文献総覧(1921-1)にいたるまで多種多様なものが見られる。また、書評欄で取り上げられた文献数は実に多く、1921年(1-3号)は312点と少ないが、以後1922年の798点(1-5号)、1923年の1091点(1-7号)など、20年代末を除くならば、毎年合計して千点前後の研究論文や書籍に対する書評が誌上をにぎわせていたのである。しかも、扱われる分野も多彩で、歴史学、社会思想史、革命運動史、哲学、心理学、法律学、経済学から文学、芸術、言語学、教育学、さらに医学や生物学など自然科学にまで及び、幅広くカバーされていることにも注目しなくてはならない。

新たな大衆読者が知的好奇心を増大させながらも、それに対する助言や手引の存在しなかった時期に『出版と革命』誌が生まれた、と指摘するのはソ連の研究者ペーラヤ女史である。彼女が、書評に取り上げられた文献の多さと分野の広さをもって、この雑誌の性格を「エンサイクロペディズム」と呼んでいるのは適切である。

### 3

『出版と革命』誌の紙面からフォークロアに関する記事をひろってみよう。ただ、フォ

ークロアに関する記事と一口に言っても、フォークロア理論と密接に関連する文学の基礎理論や、文学との関わりにおけるフォークロアへの言及もあるわけだから、厳密に言えば記事選択の作業は容易ではない。ここではあくまで、フォークロアをテーマとした論文、ならびにフォークロア資料集・研究書・論文に対する書評に限定して見ていくこととする。

まず、書評の中で取り上げられた主な文献をジャンル別に列挙するならば次のとおりである。

昔話については数は少ないが、資料集としてセローヴァ『ノーヴゴロド昔話集』(1924-5)、研究としてヴォールコフ『昔話論』(1924-5)、ブローブ『昔話の形態学』(ショールによる書評、1928-7)、同「魔法昔話の変形」(1929-1)がある。特にヴォールコフとブローブのモノグラフは、ソ連の昔話研究の出発点となったものである。

民謡、ブィリーナについては、カルトゥイコフ編『ロシア民謡集』(ヴォログダ、1922)(1923-6)があるが、何と言ってもオザローフスカヤ『ばあさんの古謡』(1922-5)とボリス・ソコロフ『語り手たち』(1925-3)の2点に注目すべきである。この両者は、20年代前半の代表的な資料集と研究書であり、前者は北部アルハンゲリスク県のすぐれた語り手クリヴォボレーノヴァから採集したブィリーナはじめ、巡礼歌、呪文、民謡、昔話等を公刊したものである。それに対し後者は、このクリヴォボレーノヴァも含め、革命前の北部のすぐれたフォークロア伝承者たちの環境、経歴、芸術手法、個性などを論じたもので、この両者とも今なおその意義を失っていない。

4行ないし2行の短い歌謡であるチャストゥーシカに関しては、革命前にすでに大部の資料集『農村のチャストゥーシカ集』(1913)を発表したシマコーフの『チャストゥーシカ

とは何か』(1927-6), グルージュ『コストロマー地方のチャストゥシカ』(1923-7)など。民衆劇関係として、ネヴェーロフ『民衆劇』(1923-7), サクーリンによる書評として『マクシミリアン皇帝』と『マクシミリアン皇帝に関する喜劇』(1921-3)。特に『マクシミリアン皇帝』(1920)は、作家アレクセイ・レーミゾフの手になるすぐれた資料集である。さらに、革命前から人形つかいとしてその名を知られていたシモノーヴィチエフイーモヴァ著『ペトルーシカつかいの手記』に対する書評(1925-7)のあることにもふれておこう。

呪文については、マンシッカによる1914年の採集「オローネツ県ブドガ郡の呪文」に対するボガトウイリョーフの書評(1928-1)がある。呪文と儀式、昔話、歴史歌謡とのつながりを重視した点、また言語学的に見ても正確な採集である点でマンシッカが高く評価されている。この他に、民族学に関するものとしては以下のものが書評の対象となっている。タン=ボゴラス編『新旧の生活様式』(1924-6), 同著『地上における文化の普及——民族学の基礎』, 同著『民族学から見たキリスト教』(ともに1928-4), ガーゲンニトレン「タンボーフ県の婚礼」(ポリース・ソコローフの書評, 1927-3), ブロムキスト「カルーガ地方の農民の住居」(1928-3), マチンスキイ『農民の小屋と屋敷』(1922-7), またさらにはエヴドキーモフ『ロシアの玩具』(1925-7)など。

定期刊行物・論集に対する書評にも注目すべきものがいくつか見られる。まず、1926年にユーレイ・ソコローフの編集で発刊された『芸術フォークロア 1』(-5, 1929)(ショールの書評, 1926-7), 『民族学資料 3巻 2号』(1928-3), またはシベリアにおけるフォークロア研究を推進する上で大きな力となった『シベリアの生ける過去』(1-7, 1923-28)(オ

リデンブルクによる書評, 1928-8)。1925-26年にレニングラードの芸術史研究所によって行なわれた北部奥オネガ、ピネガの伝統文化調査の報告書『農民芸術 2』に対する書評(1929-2・3)も、特に近年においてその調査の「総合性」が見直されており興味深い。<sup>(12)</sup>

農民の文化に対する注目は、直接フォークロア関係書を扱った書評にも見られるが、それ以外にも例えば、今世紀初頭から20年代に活躍し今ではほとんど忘れられた農民風俗作家セミョーン・ポドヤーチェフの著作集に対する書評の中にも見出される(スミルノーフニクタチェスキイの書評, 1928-4)。このことはさらに、地方文化に対する強い関心とも結びついており、地方雑誌『北部』(ヴォログダ, 1922-23)や『郷土研究』の書評(1923-7), ピクサーノフのすぐれたモノグラフ『地方文化の拠点』への書評(1928-3), さらに書評ではないが、雑報欄における、地方の文化・芸術・印刷・出版動向の詳細な報告(特に雑誌の初期に顕著な傾向として)の中にも明確に読みとることができる。

革命後に出た最初のフォークロア研究書誌として名高いブローツキイ他の編による『ロシア口承文学』(1925-5・6), フォークロア採集の手引書として今なお基本的には意義を有するソコローフ兄弟『農村のポエジー』(1926-6)が取り上げられている。また、のちにソ連民俗学を主導するひとりとなったアザドーフスキイの『シベリア書誌総覧』の書評(1923-3)のあることも指摘しておこう。

書評の対象となったフォークロア関連文献は、点数としてもあまり多くなく、各ジャンルにわたってもれなくひろわれているわけではないが、このことは、特に20年代前半には方法論的模索が行なわれるだけで、具体的なモノグラフが発表されなかった、あるいはされにくかったことに起因するものと思われる。しかしその一方で、小さな雑誌論文もま

じて基本的文献が書評として取り上げられており、しかも執筆者としては、ボリス・ソコロフ、ボガトゥイリョーフ、オリデンブルク、スミルノフ＝クタチェスキイ、ゴロヂェーツキイ、ブリューソフ、サクーリン、フリーチュなど多彩な顔ぶれが並んでいるのは注目される。

## 4

次にフォークロアに関する論文、ないしは資料紹介に移ろう。これは書評に比べれば数が少ないが、それでも以下にあげるいくつかに掲載され、しかもそれらにははっきりとしたある特徴が現われている。

スミルノフ＝クタチェスキイの「現代農村のならず者のチャストゥーシカ」(1925-7)は、筆者自身が1923-24年にヤロスラヴリ県で採録したものを中心として、60ほどのチャストゥーシカをあげた資料紹介である。同じく彼の「現代民衆詩のモチーフ」(1925-5・6)も、調査によって得た資料をまじえながら、当時の都市近郊の農村における歌謡フォークロアの問題点を指摘したものの。さらに彼の「現代農村の歌謡における諷刺的モチーフ」(1928-2)は歌謡を材料として、そこに描き出された諷刺、ユーモア、パロディといったモチーフを検討する。これらの論文はいずれも短いながらも、都市の影響下で、農村の古くからの伝統的フォークロアが変質していくと同時に、新しいモチーフを備えたフォークロアが生まれつつあることを指摘している。

20年代の農村において伝統文化がいかに変化しているか、時に荒廃しているときえ見える農村にとって新しい文化とは何か、といったテーマが当時の民俗研究者にとって重大な問題であったことは言うまでもない。<sup>(14)</sup> ヴィノグラーツカヤの「現代の農村」(1924-6)

は、社会経済史や統計的研究ではカバーできない農村生活の変化について、25ページにわたって論じたものである。彼女の論文は先に書評の箇所であげたタンニゴラス編『新旧の生活様式』(1924)を紹介したもののだが、たんなる紹介にとどまることなく、北部農村の宗教、信仰、結婚、若者や村の共産主義者の生活、階層分解などについて述べた力作である。

『出版と革命』誌のみならず、広く20年代のソ連民俗学全般において注目され、多くの言及がなされているジャンルはチャストゥーシカであろう。すでに述べたとおり、チャストゥーシカとは4行ないし2行からなる短い歌謡であり、起源の新しいフォークロアのジャンルである。しかも民衆の生活や風俗を直接に反映している点で、昔話やブィリーナと比べて、同時代性のきわめて強いフォークロアと<sup>(15)</sup>言える。上であげた「現代農村のならず者のチャストゥーシカ」の著者スミルノフは、この他に論文「チャストゥーシカの発生」(1925-2)を発表している。これは、20年代のチャストゥーシカを素材として、生産手段の変化から見たチャストゥーシカ、社会的危機の指標、「勇敢な」歌謡のモチーフの継承、滑稽な歌謡としてのチャストゥーシカ、その民衆性、起源をめぐる諸説、といったさまざまな面からこのフォークロアを論じたもの。この時代のチャストゥーシカの収集の一部がスターリン時代に抹消された、という現代ソ連の研究者の告白を知る時、スミルノフの諸論文とそこで引用されたチャストゥーシカの意味は大きい。<sup>(16)</sup>

チャストゥーシカの起源に関する問題にも言及しながら、都市フォークロアの一側面を論じたのが、ソーボレフ「現代の工場・都市フォークロア」(1929-6)である。彼は、チャストゥーシカと工場フォークロアとのつながりについては現象的に見て否定し、チャス

トゥーシカが基本的には農村のものであり、工場では消滅したか、見出されたとしてもそれは偶然だとしている。この点で、チャストゥーシカの生まれ故郷が工場だとする先の<sup>(17)</sup>スミルノーフとは反対の考えを提出している。ソーボレフの考える都市・工場労働者のフォークロアとは、ほとんどが歌謡であり、そこには伝統的な農民起源の抒情歌謡と、文学作品などから借用した歌謡という2つのレパートリーがあるとする。さらに、都市の商人など中小ブルジョア階級の歌謡として、感傷的なロマンスの存在することにも、その現象に対しては否定的ながら、論及している。

純粋な意味ではフォークロアのジャンルではないが、この雑誌と民衆文化とのつながりを見る上で忘れてはならないことは、書籍のさし絵など装飾芸術に関する論文が数多く見られることである。シードロフによる「本の芸術」(1921-1~3)、「ロシア・イラストレーション史概観」(1922-1, 2, 3, 8)の連載をはじめ多数の論文。またアダリョーフその他による「ロシアの版画家」シリーズも革命前の版画家を数多く取り上げて、その伝記と芸術創作を記したもの(1921-3, 1922-1, 3, 1923-1, 4等々)<sup>(18)</sup>である。

こうしたさし絵、版画、線画といった、従来あまり注目されなかった装飾芸術について、しかも革命前の伝統を掘返す形で精力的に論じられたことは重要である。出版活動全体に対する大きな関心の中で『出版と革命』誌が生まれたということからすれば、本のさし絵などに対する着目は当然であったかもしれない。しかしながら、新しい大衆読者に向けて、活字ないし書籍の新たな意味づけを提供しようとする時、さし絵もまた、新しい意味づけを志向する民衆文化であったのである。

最後に、プラカードに関する2つの論文——ポロンスキ「ロシアの革命プラカード」(1922-5)、トッゲンドホーリト「現代

のプラカード」(1926-8)——にふれておこう。<sup>(19)</sup>特にこの中の前者は、『出版と革命』誌の編集者で、赤軍のプラカード作成部門にもいた筆者による刺激的なプラカード論である。これは20ページほどのものだが、のちに同じ題名の単行本として出版されている(1925)。革命後の状況下で、きわめて実際の機能を果たす視覚芸術としてのプラカードが「現代都市の申し子」である時、それはまた、都市と街頭のフォークロアを形作るひとつの要素となっていた。この意味で、ポロンスキの論文に着目したい。

## 5

雑誌『出版と革命』はフォークロア研究のための学術専門誌ではなく、あくまでも一般読者を対象としたものであるから、ここに20年代ロシアの民俗学研究所のすべての側面が反映されているわけでは決してない。しかし、以上のように見てくると、この雑誌を通してこの時期のフォークロア研究の傾向のいくつかが浮かびあがってくる。

それはまず、チャストゥーシカや工場労働者の歌謡(さらにプラカードも)が取り上げられていることに示されているように、「現代」の新しいフォークロアが好んで対象とされているという点である。

第二に認められる傾向として、主として都市を中心とした民衆文化に対する関心があげられる。都市文化を背景とする民衆文化とはすなわち出版・活字文化に対する渴望でもあり、それもまた新たなフォークロアを生み出す源泉だった。20年代の急激な社会変動の中で、都市が新しい可能性を秘めた文化空間として再生していったこと、そして都市のフォークロアが新たな形を取りながら、ひとつの民衆文化を形成しつつあったことが『出版と革命』誌を通して確認できるであろう。そ

一方で農村は、都市の影響を受け急速に変質していった。ならず者・不良のフォークロアは、当時の農村の現実の一面を明瞭に示している。そしてこうした農村の変化に直面した民俗研究者の感慨も、雑誌の記事の中に明らかである。

『出版と革命』誌に反映されたフォークロア研究における1920年代とは、さまざまな理論の乱立と、それら相互の衝突を通じて新たなソ連民俗学を形成していく過程の時期であった。この時期、ソ連民俗学界で注目すべき存在は、すでに革命前から多くの業績を残していたボリスとユーリイのソコロフ兄弟であろう。1921年12月にユーリイは、地方研究学会全ロシア会議の場で、フォークロア資料とその採集活動の意義を再確認し、ソ連民俗学のいわば出発点を作った。さらに5年後に彼は、ソ連民俗学の方向を決定する上で大きな意味を持つ「ロシア・フォークロア研究の当面の課題」<sup>(21)</sup>を書く。

文学とフォークロアとの関連をめぐる問題は、フォークロアを言語芸術としてとらえるロシアの民俗学においては、19世紀から論じられてきたが、20年代にも再燃した。すなわち、ソシユール言語学の立場から文学の個人創造とフォークロアの集団創造の関連を述べたヤーコブソンとボガトウイリョーフ共著の論文、それに対して、サクーリン的見地からなされたユーリイの批評は、20年代後半から30年代にかけての理論動向をはっきりと反映するものだった。さらに、フォークロア伝承者ならびに作品中の人物の階級性・歴史性的問題、そこから生ずる叙事詩の起源に関する問題は、1936年の有名な論争と翌年のユーリイによる締めくくりによって一応の決着を見ることになる。そうした中で、アンドレーエフらのフィンランド学派、フォルマリズムの流れを組むブローブ（彼の『昔話の形態学』に対する最初の書評が『出版と革

命』誌に掲載されたことは重要である）らに対する批判と彼らの自己批判、フォルマリストであるジルムーンスキイの自己批判が行なわれていったことは、やはり30年代半ばまでにソ連民俗学の骨組が形作られたことを物語っているであろう<sup>(23)</sup>。

20年代の都市と農村の相克、伝統と革新の葛藤、古い習慣と新しい生活の衝突を追求することこそが『出版と革命』誌のすぐれて緊急のテーマであった。「国内の文化革命の規模と、ユニバーサルな知識の広さに対する民衆の志向とを反映した」<sup>(24)</sup>この雑誌が、1920年代のロシア民衆文化の上で果たした役割は大きい。この雑誌が「エンサイクロペディズム」を喪失して、1930年に廃刊へ追いこまれていった時、民衆文化への視野も失われ、文化革命への道も事実上閉ざされたのである。

## 注

1. 1920年代の文学関係の雑誌については、Очерки по истории русской советской журналистики. 1917-1932. М., 1966.; Максимов, А. А. Советская журналистика 20-х годов. Л., 1964. また、この「厚い雑誌」の出版に刺激された形で『プロジェクトル』(1923-1935)『赤きネヴァ』(1923-1931)『オゴニョーク』(1923-)といった「薄い雑誌」が出版された。Очерки по истории..., стр. 69.
2. 革命前の文盲率は1897年の国勢調査による。また、1919年12月以降に本格的に展開された文盲撲滅運動については、米川哲夫「国内戦期における文盲撲滅運動」江口朴郎編『ロシア革命の研究』(中央公論社, 1973)所収。
3. 初期のゴズダートの組織とその活動に関しては、『出版と革命』誌の以下の論文に

- 詳しい。Полонский, Мещеряков (1921-1); Степанов (1921-2); Полянский, Кантор (1927-7) さらに、このゴシズダートの活動も含めて革命後の出版活動については、Назаров, А. И. Октябрь и книга. М., 1968. Издательское дело в первые годы Советской власти. 1917-1922 гг. М., 1972. Fitzpatrick, S. The Commissariat of Enlightenment. London, 1970.
4. Печать и революция, 1921-2, стр. 236.
  5. 革命前ロシア最大の出版人だったスイチンは、1919年5月に自分のすべての印刷施設、資産をゴシズダートに公式に委譲している。Сытин, И. Д. Жизнь для книги. М., 1962, стр. 202.
  6. 『出版と革命』誌以前にも、ゴシズダートから書評誌として『本と革命』(Книга и революция, 1920-1923) が発刊されていた。
  7. 奇妙なことに、『ソビエト歴史百科事典』(1961-1976)の「出版と革命」誌の項の説明中にはボクローフスキイの名前はない。
  8. Белая, Г. А. Печать и революция. В кн.: Очерки по истории..., стр. 249. ボロンスキイは、10月革命後にメニシェヴィキから共産党へ加わった人物で、『ロシアの革命ポスター』『マルクス主義と批評』などの著者、バクーニン研究や『ノーヴィ・ミール』誌の編集によって知られている。
  9. 再編成によって、書評部分は『本と革命』誌(再刊 1929-30)へ移行。また終刊後は『文学と芸術』誌が発刊された。
  10. Белая, op. cit., стр. 252.
  11. Ее же, стр. 245.
  12. 1976年に調査50周年記念会議と資料展示が行なわれた。Советская этнография, 1977-4.
  13. この研究書誌と調査ハンドブックの意義については、Савушкина, Н. И. О собрании фольклора, М., 1974, стр. 13.
  14. このことは例えば、上述の芸術史研究所による調査の意図の中にもはっきりと示されている。注12, さらににはこの調査のフィールドノートとして、Колпакова, Н. П. У золотых родников. Л., 1975. を参照。
  15. ニコライ・ネーフスキイは、ベトログラード大学在学中の1911年夏に、ヤロスラヴリ州でチャストゥーシカの採集を行なっている。彼はその中の7個を日本語訳によって紹介し、簡単な説明を付している。「ろしあの百姓唄」『アララギ』13巻10号(1920)。なおチャストゥーシカの訳語として、「早歌」(ネーフスキイ)「端歌」(昇曙夢)。
  16. Горелов, А. А. Русская частушка в записях советского времени. В кн.: Частушка в записях советского времени. М.-Л., 1965, стр. 7. さらに、Неподцензурная русская частушка. New York, 1978. の序文を参照。
  17. スミルノーフクタチェスキイ(1876-1958)は、『出版と革命』誌に書評8, 論文4を記しており、この雑誌のフォークロア部門にとって欠かせない人物である。ただ、彼についてはヤロスラヴリ地方のフォークロア研究家であること以外は不明で、この雑誌との関連についても明らかでない。チャストゥーシカがどこで発生したか、に関して現在では一般的に、都市と農村の接点、すなわち伝統的な歌謡と活字によって流布した歌謡の衝突し、異なる2つの文化の接触する場所とされている。Кравцов, Н. И. и Лазутин, С. Г. Русское устное народное творчество. М., 1977,

- стр. 230. 最近のチャストゥーシカ研究については, Горелов, А. А. Частушка — с разных точек зрения. Русская литература, 1972-4.
18. この他に注目すべきものとして, 日本の浮世絵を論じたグレーチ「日本の木版画」(1924-2)がある。
19. 書評として取り上げられたものとして, Пунин, Н. Н. Русский плакат. 1922. Das Politische Plakat. 1919. など。
20. 散策者の立場から見た20年代ソビエトの都市空間については, 海野弘「ペテルブルグの散策者」『現代思想』(1979-9)。そこで指摘されたフェリエトン文学の重要性については, コマローヴィチ「ドストエフスキのペテルブルグ・フェリエトン」『ドストエフスキの青春』(中村健之介訳 みすず書房, 1978)。フェリエトンに関しては, 本稿ではふれなかったが, 『出版と革命』誌にもいくつかの書評・論文があり,
- 都市のフォークロアを考える上で重要である。
21. 1921年のユーレイによるテーゼは, Бродский, Н. Л. и др. Русская устная словесность. Л., 1925. によって見る事ができる。Соколов, Ю. М. Очередные задачи изучения русского фольклора. Художественный фольклор 1, 1926.
22. Якобсон, Р. О. и Богатырев, П. Г. К проблеме размежевания фольклористики и литературоведения. 1929. В кн.: R. Jakobson, Selected Writings, IV; Соколов, Ю. М. Фольклористика и литературоведение. В кн.: Памяти П. Н. Сакулина. М., 1931.
23. 1936年の論争も含め, 30年代前半までの動向に関しては, Соколов, Ю. М. Русский фольклор. М., 1938.
24. Краткая литературная энциклопедия, т. 5, М., 1968, стр. 7346.